

八戸市の公園整備の現状と問題点

馬 場 道 子

I は じ め に

現在は、これまでの高度経済成長を背景とした急激な都市化の進展や生活水準の上昇がもたらした、生活環境の変化に対する、反省の段階であり、更に、生活環境に対する要求が質的により高い水準に移行してきている段階であるといえる。

都市化に伴う無秩序な土地利用や市街地の拡大に伴う緑地等の潰廃に対する生活環境への認識の高まりは、人為的な「都市公園」の建設を促し、それによってレクリエーションの場、緑地景観のスペースを確保してきた。

しかし今日、量的な不足という問題が生じると共に、生活水準や国民意識の向上に伴う公園の意義の重要性が高まってきた。

それに対して公園普及を高めるために、法的な方策が打ちだされ、各自治体では水準の確保に取り組んでいる。大都市での積極的な取り組みに対し、地方の中規模都市ではいかなる方向で行われているかについて、八戸市（人口 24 万人）の場合を例として、現況を把握しながら、諸問題を指摘するのが、本研究の目的である。

II 八戸市の公園整備の現状

八戸市公園緑地課の調べによると、昭和 58 年 3 月末現在の当市の公園は、緑地を含め 80 箇所、総面積 100.92 ha に及び、人口 1 人当りの面積（普及率）が 4.20 m^2 と、全国平均とほぼ同じ値を示している。これを同じ青森県の弘前市（人口 17.6 万人）と比較した場合、その普及率は約 1 m^2 少なくなっている。公園種別にみると、弘前市は総合公園の規模が大きいこと、規模こそ小さいが児童（幼児）公園の数が多いことなどが、八戸市の場合と異なる点である。大規模で、週末休日の余暇活動の場として、広範囲から利用者の集まる公園を「広域利用公園」、児童公園等日常・平日に余暇活動を行う場として周辺住民により利用される公園を「地域内利用公園」として普及率をみた場合、前者でも八戸市が弘前市より 1 人当たり約 1.5 m^2 少なく、後者は総面積では差がないものの、普及率は約 1 m^2 と身近かで利用度が高いと思われるにもかかわらず低い。

現在に至る公園整備の背景、発達の過程をみると、昭和 40 年度以後は、大規模公園の整備に加え、各種公園の着実な整備が行なわれている。これは、昭和 47 年の都市公園等整備緊急措置法や、それを受けた 3 期に渡る公園整備 5 年計画の諸法規に負うところが大きい。

具体的な公園整備の方法としては、土地開発手法で最も有力なものである土地区画整理事業や団地造成によるものがほとんどで、約 70 % を占める。これは、土地区画整理がその施行にあたり施

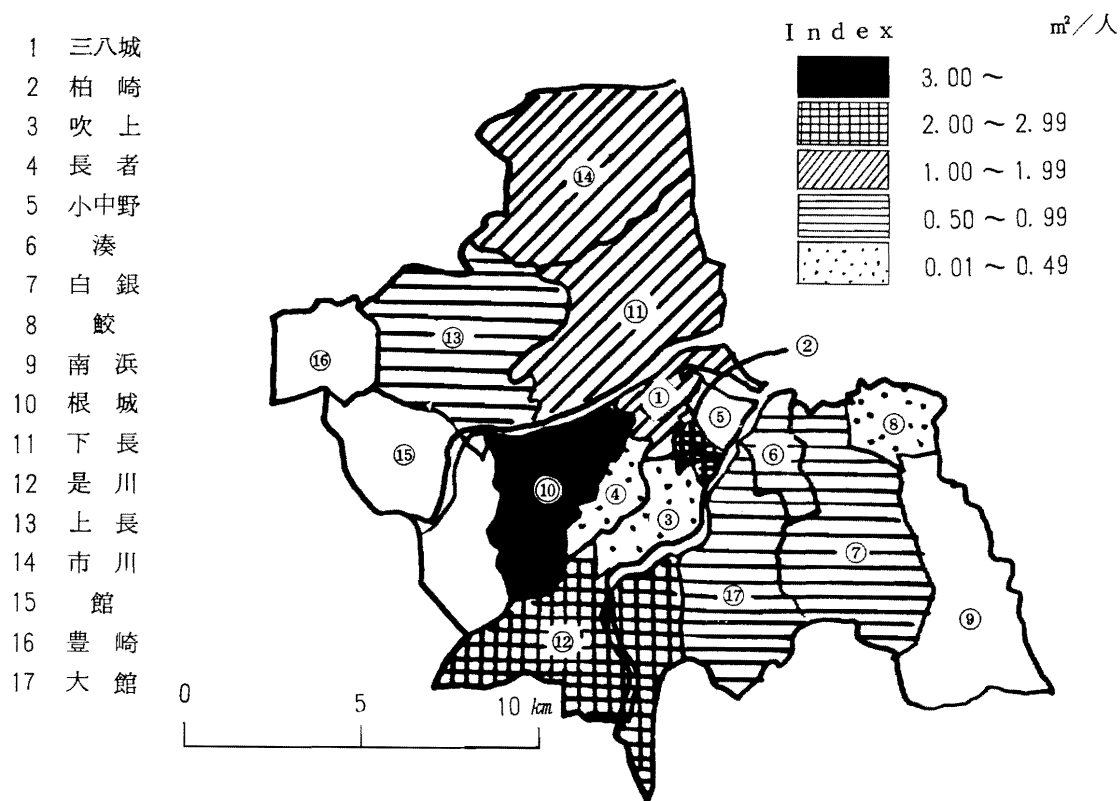
行面積の3%以上の公園緑地の確保を義務づけているためである。このことから、公園の確保や整備が実際は「法規義務」による行政サイドからの一方的なものであるということが言えよう。

Ⅲ 公園分布の偏在性と需給バランス

土地区画整理や団地造成による公園整備はその分布に偏在性を生じさせている。すなわち、これらの施行が市街地の拡大を促すものであるために、公園が中心部の周辺に偏って分布している。この偏在性が、利用者である住民の人口分布との関係で、需給バランスに地域差をもたらしているという問題を指摘することができる。

図1は、市内17地区の1人当り公園普及面積を示したものである。

これによると、普及率が2㎡以上の相対的に公園環境の良い地区は②柏崎地区⑩根城地区⑫是川地区である。いずれの地区も先に述べた区画整理や団地造成の広く行われた地区である。



(⑨ ⑮ ⑯ は、公園が設置されていない為、算出していない。)

図1 地区別1人当り公園面積

②柏崎地区は、地区面積が17地区中最小であり、人口密度が7,000人/haと人口集中の著しい地区でありながら、区画整理や宅地造成が60～70%も行われ、規模の大きい児童公園や近隣公園が比較的多く整備されている。⑩根城地区は、長根運動公園という大規模公園を地域内利用公園として含めたために普及率が極めて高いが、ここも区画整理により近年になって児童公園・近隣公園が数ヶ所設置された地区で、人口も多い地区である。⑬是川地区は、是川団地に人口・公園が集中しているために“是川団地”として捉えればより豊かな公園環境を示すであろうと考えられる。

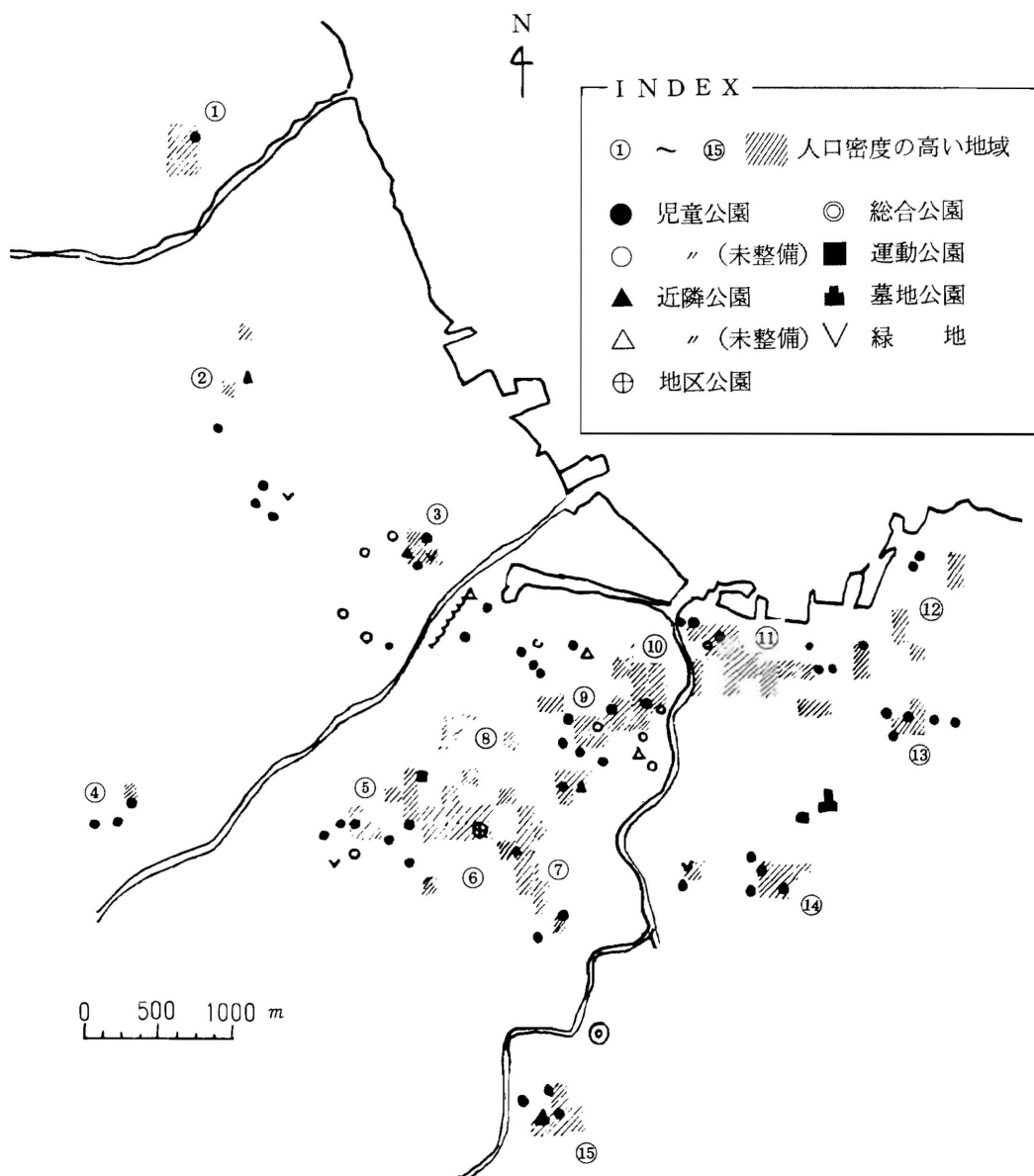


図2 人口密度地域と公園分布

逆に公園普及の極めて不良なのが、③吹上地区④長者地区⑧鮫地区で0.5㎡/人に満たない。

③吹上④長者地区は、互いに隣接し合うと共に、中心商業地区と接し、古くから市街化されてきた地域で、居住地域としての機能を持ち人口も多い。それゆえに、無秩序な市街化の進行が著しく、オープンなスペースは極めて少なくなり、また公園緑地の用地の確保は非常に困難である。

⑧鮫地区は、市経済を支える漁業の中心地として合併前より栄えてきた。近年は人口減少傾向を示しているが、依然人口密度の高い地域の1つである。吹上・長者地区と同じように無秩序な市街化が行われたことや、公園緑地に対する無関心さなどによって、現在のような状態となっている。

他地域は、相対的には中程度ではあるが、絶対的には一層充実させる必要がある。

さらにミクロなスケールで人口密度との関係をみると、局所的なバランスの相異が明確に示される。図2は、人口密度と公園分布の関係をみたものである。

高密度でありながら、比較的バランスのとれている③④⑤⑧⑩⑬⑭⑮の地区は、ほとんどが団地又は区画整理施行地域にあり、標準対象人口、誘致距離を考慮しても標準以上と判断できる。

これに対し、バランスのとれていないのは⑥⑦⑨⑪⑫の地区で、旧市街地がほとんどである。特に著しくアンバランスなのは⑥⑦⑪の建ぺい率も非常に高い地域であり、このような地域こそ、公園の利用度が高く、その整備が進められなければならない。

これら、公園分布の偏在性と人口密度との地域的バランスの差異には、次のような背景が考えられる。

- ① 旧市街地に形成された無秩序な町並みが戦災をうけなかったために、今日に至るまで残存していること。
- ② 市街地周辺に比較的緑地が多く、あえて人為的な公園を必要としなかったこと。
- ③ 近年の公園整備は、具体的手法として、土地区画整備による法的な用地確保によっており、更に、「整備」より「開発」が優先的に行われていること。
- ④ 住民の社会的投資、環境問題に対する意識が低いこと。

更に、図2から、人口密度が低いにもかかわらず公園が多く分布する地域がみられるがこれらの地域は土地区画整備が行われ、今後人口の増大が見込まれる地域である。

Ⅳ ま と め

これまでの客観的な現状の把握により、

- ① 全国平均並みの普及率を持つが、平日、余暇活動で利用される児童公園、近隣公園の絶対量の不足
 - ② 分布の偏在性と、それに伴う人口と公園の需給の相対的バランス、アンバランス
- というような問題を指摘してきた。これらはこれまでの公園整備の反省点として、又今後の水準向上のためには、基本的かつ重要な問題ではあるが、先に掲げた諸背景があり、解決には大きな努力を要する。ネックとなるのが「市街地」の扱いであることは、言うまでもない。

量の確保、分布の充実といった公園整備は無秩序な市街地と財源不足、更に住民の意識・認識不足というような今日の問題によって、非常に困難な状態にあるといえよう。

現時点ではまだ重大な危機に直面している段階ではないし、市全体の動きが「開発」の方向に向いている為に、公園緑地、広義のオープンスペースに対する関心は高いとはいえない。しかし、それゆえに、徐々に関心を持つ必要があると思われる。

民間の公園緑地又広くはオープンスペースに対する意識の向上と、行政サイドの積極的かつ柔軟な緑地公園やオープンスペース確保の取り組みが一体となった時に、市街地内の公園整備、オープンスペース整備は可能なものとなるであろう。具体的な方法として、公園施設や工場等の移転跡地や民間所有の小規模な空閑地を買収、借用し、あえて公園として整備しなくても開放という形で提供したり、また新しいユニークなものとしては、商店街を中心に公園化するなどの方法も考えられる。

単に客観的な量や分布の充実でなく、それを利用する住民の実際の充実感、つまり質的な充実を追求した公園・オープンスペースの整備が望まれる。

本稿を作成するにあたり、御指導下さった水野先生、後藤先生、資料の提供を通して御協力下さった八戸市公園緑地課、企画課、区画整理課の方々に、深く御礼申し上げます。

【参 考 文 献】

- 石田頼房（1981）：都市基本計画の重要性と都市開発・整備 都市問題 72－12， 3～14
- 大庭常良（1983）：都市の環境診断の緊要性 環境情報科学 12－4， 1
- 佐藤 昌（1962）：都市におけるオープンスペース 都市問題 53－3， 3～11
- 橋詰直道（1979）：東京都における都市公園の発達過程とその分布構造 地理評 53－3，
189～202